

いま『資本論』をいかに読むべきか：精神分析とラ カンの視点から

古賀，徹
九州大学

<https://hdl.handle.net/2324/7238337>

出版情報：哲学年報. 66, pp.19-41, 2021. 北海道哲学会
バージョン：
権利関係：



いま『資本論』をいかに読むべきか

——精神分析とラカンの視点から

古賀

徹（九州大学）

序、問題の所在

マルクス生誕二百年を迎える今日において『資本論』をあらためて論じようとするれば、次の二つの問題を回避することはできない。

一つにはテキスト内在的な問題である。マルクスは、『資本論』第一巻、第一章の「商品」において、おもに市場における商品交換の事実にもとづいて「価値」概念を規定している。ところが同時に、第五章以下の剰余価値論においてマルクスは、工場生産における「抽象的人間労働」の支出量にもとづいて「価値」概念を定義している。つまり、価値は一方においては流通局面における社会的関係性から、他方においては生産局面における労働の時間的支出量から定義されているのである。『資本論』の中核概念である価値は、はたして関係的なものか、それとも物質的なものか、これが第一の問題である。

もう一つはテキスト外在的な問題である。マルクスの『資本論』が記述された時代は産業資本主義の時代であり、そこにおける経済学の客観性、すなわち法則的必然性の基礎は、生命的な窮乏化にともなう〈必要〉の論理、つまり自然必然性のうちにあった。この自然必然性を基軸として資本主義の運動を客観的に認識するところにマルクス経済

学という科学性が存立していたのである。だが、マルクスの視界に十分に入っていなかったのは、工業化を遂げた社会において苛酷な物質的強制が大幅に緩和するという事態であった。そこにおいて人間を何かへと強制し、結果として人間から何かを剥奪するのは、もはや剥き出しの自然必然性ではなく、むしろ社会的な必然性である。物質的強制力に基礎をおくマルクス経済学（もしくは経済学総体）が、「豊かな」現代においてその理論的説明力を喪失するのは当然のことであった。

テクスト外的な資本主義をめぐるこうした状況の変化は、じつはテクスト内部における価値概念の解釈とも密接に関係している。人間の自然身体が生産局面で根源的に形成する価値が市場という流通局面において不当に「搾取」されるという図式は、価値が人間身体への必要と密接な関係を保っていた産業資本主義の時代には当然視されたといえる。そこにおいては、生きた身体による労働の支出を価値の源泉とみなし、それに対する市場評価を資本主義時代に固有の不正の源泉であると見なす、労働価値説優位の価値論が前面化する。その結果、労働の支出が物質ベースで正しく評価（補完）される生産中心型計画経済が企図されることになる。つまりそれはロシアソビエト型のマルクス主義である。

だがこれに対して、自然必然性の強制力が大幅に緩和され、市場における消費者選択が優位となる社会にあつては、価値解釈もまた関係論優位となる。この方向性は、『資本論』における関係論的な価値記述や物象化論を典拠にしつつ、単純な物質的窮乏化論（初期マルクスにおける単純な現実性剥奪論＝疎外論）を回避して、現状を危機と判断しうる批判的「意識」に着目する。つまりそれは、『歴史と階級意識』のルカッチを源流とし、フランクフルト学派の批判理論に受け継がれる西欧マルクス主義、さらには戦後の廣松渉や柄谷行人のような日本のポストモダン的なマルクス解釈の系譜である。

前者の系譜がもはや現代に通用しなくなったのは当然であるが、しかしながら後者の系譜もまた、依然として幾重

にも問題を抱えている。つまり、市場や交換、流通局面をより重視して価値を關係論的に規定すればするほど、物質的必然性に代わる關係論的必然性、さらには意味論的必然性を経済学の内部に提示することが必要となるが、しかしそうした理論的裝備を『資本論』、もしくはマルクス主義はほとんど持ち合わせないのである。また同時に、こうした關係論的価値規定は、労働力、すなわち労働者の身体における物質性の問題を価値論から除外し、労働力の根底をなす物質（生命）の概念を経済学から排除し、その結果、その価値論において敵対するはずの新自由主義へと逆に接近するという点である。

マルクス主義がその理論的説明力を喪失したのは、物質と關係を巡る価値論解釈というテキスト内在的な問題と、物質的必然性から關係論的必然性への移行という資本主義の歴史的 성격についての外在的問題の二つの問題をととも曖昧化したためである。

この問題に対して本論は、第一に、『資本論』における価値論をラカンの象徴論の観点から統合的に再構成し、次いで物質的必然性に代わる關係論的必然性の論理を精神分析のうちに探る。その上で、マルクス主義における物質概念の解釈をラカンやベンヤミンの記号論の観点から再構築し、それによってマルクス解釈、もしくは現代におけるマルクス主義の課題を示唆する。

一、価値概念の象徴論的解釈

商品とは、それが胃袋から生じようと空想から生じようと「その属性によって人間のなんらかの種類の必要 Bedürfnisse を満足させるもの」(49)である⁽¹⁾。この「必要」の概念は、産業資本主義の時代に書かれた『資本論』の全体構成から見ると、たとえそれが「空想」から生じようとも、基本的にはほぼ物質的必然性の枠内で論じられている⁽²⁾。この物質的補充の必然性のゆえに、法的に自由であるはずの人間が、商品を購入するために自ら商品

（労働者）となり、自己を最終的には破滅させる市場や雇用といった関係性のうちへと〈自発的Ⅱ主体的〉に進み入ることになる。

他方で、豊かな消費社会にあつては、その生物学的「必要」は、社会的な「欲望」へと軸足を移行させる。市場における買手は相手方の商品にみずからの「欲望」を投影する。同様に商品の売り手も、買手がその懐に所持する貨幣に対して同様のイマジネールな欲望を抱く。お互いの所持物は、それぞれにとつて、それを入手すれば自らの意味的欠落を補完し、みずからの承認欲求とその全能感を満足させてくれるはずの何かであり、そのかぎりで社会的に有効な意味を帯びた記号である。ラカンを対象に向けられるそうした第一次的な欲望を「想像的なもの [imaginaire] と呼んだ」(3)。

こうした想像的欲望が生じるのは、精神分析のエディプス・コンプレックス理論によれば、〈主体〉に巣くう去勢不安のゆえである。幼児は母親との原初的な一体性のうちで享受するイマジネールな全能感を、社会の現実を代理する父の介入によつて阻まれる。幼児は自らを無力化した父をまずは憎むが、同時に父へとミメシスすることで、その根源的な喪失感（去勢不安）を補完する。この愛憎コンプレックス（エディプス・コンプレックス）はやがて忘却され、そこに「主体」が形成される。思春期を迎えた「主体」は、根源的な去勢不安に駆られて、父の代理物として地位や金銭といった社会的記号を求め、母の代理物として性的パートナーを欲望する。ここで抑圧とは、適応にとつて不都合な現実を忘却すること、根源的には、エディプス期における主体形成の原史を忘却することであり、忘却されたものが症状として再現されたものが神経症である。

だとすればここで商品とはすべて、全能感を回復させてくれるはずの母と父の代理物であり、したがつて主体の根源的な承認欲求と深く結びついたセクシュアルなものである。フロイトⅡラカンの理論枠組みからみれば、商品を求める強制力は、生物学的欠乏の補充というたんなる自然必然性ではもはやなく、承認の喪失とその補完という社交的な

必然性であり、症状としての反復強迫としてもたらされる。『資本論』における商品分析を現代に引き継ぐためには、精神分析の關係論を経なければならぬ必然性がここにある。

それでは精神分析の視点から『資本論』冒頭の価値形態論を再構成してみよう。市場において向き合う二人は、交換を通じて己の全能感を再現しようと欲望している。ヘーゲルが「主人と奴隷の弁証法」でその機序を明らかにしたように、そのとき両者は、自己の欲望達成のたんなる手段として相手を互いに利用しようとする相克のうちにある。両者のイマジネールな欲望に折り合いを付け、それぞれが目的を達成するために互いに妥協する地点、つまり快感原則が現実原則に道を譲る限界点において、商品の交換比率、すなわち交換価値（価格）が現象する。幻想のうちで快感を追求するありかたが挫折し、はじめて社会の現実が、いわば堅い「もの」であるかのように主体に現れてくる。

他者との相克のうちで、「もの」そのものももっていた本来の実質がはじめて洗い出されてくる。二つの商品の交換がまさにそうしたかたちで実現したのは、そこにまえて何か「共通のもの」が内在していたからであると思いなされる。これがマルクスのいう「価値」である。「商品の交換關係または交換価値のうちに提示される共通なもの das Gemeinsame、それはすなわち商品の価値である」(53)。『資本論』冒頭の商品論は、一方で商品の交換の事実から商品の価値を直接的に規定するが、しかし他方で、その交換の背後に、それに先だってそれを可能ならしめた何かを実体的に措定しているかのように読める。

この「共通なもの」を引き継ぐのは、「抽象的人間労働」なる概念である。したがってこの概念のうちには關係性と実体性のかの二面性が引き継がれ、その矛盾が先鋭化することになる。それぞれの商品を生産した質的に異なった人間労働は、当の商品が交換されること通じて、その質的・様相的性質を捨象され、両者の価値を共通に規定する労働、「抽象的人間労働」へと差し戻される、とマルクスはいふ。このかぎり、この抽象的人間労働は交換においてその有用性が実証されたかぎりの労働であり、したがってひとまずは市場における關係の事実を前提として仮構された

事後的な概念である(5)。

だが他方で、マルクスはこの抽象的人間労働を、労働する人間の現実的な支出として実体論的に規定してもいる。「ある使用価値または財貨が価値を持つのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているから」であり、その価値の大きさは、「価値を形成する実体の量、すなわち労働の量」によって計測され、その量は「労働の継続時間で計られ、労働時間はまた一時間とか一日とかいうような一定の時間部分をその度量標準としている」(53)。しかも、「一面では」という限定付きながらもマルクスは次のようにダメ押しする。「すべての労働は一面では生理学的な意味での人間の労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成する」(61)。この論述は、抽象的人間労働を関係ではなく実体量の連続的支出から説明するものであり、読み手はこの説明を、市場における交換関係から独立した、物質ベースの価値論として読まざるをえない。

交換価値、もしくはその実体論的表現である「価値」に相当する基準点は、精神分析の観点から見ると、ラカンのいう「象徴的なもの *le symbolique*」の次元に位置する。伝統的に象徴とは、精神的な理念を宿した物質的記号を意味するが、その精密な定義を『芸術の理論』(1802-1803)におけるシェリングの定式化のうちに確認しておこう。「特殊なものの中で普遍的なものの特異的なものが絶対的に区別不能であること *absolute Indifferenz des Allgemeinen und Besonderen im Besonderen* をもって絶対的なものを提示すること」は「ただ象徴的にのみ可能である」(6)。すなわち象徴とは、普遍的な意味と特殊な物質が相互に浸透し、両者が完全に一体化して、そこに個別者が存立するありさまのことである。

市場におけるイマジネールな欲望の相克、その主と奴の弁証法は、互いの幻想と幻想の接点に象徴という楔を打ち込むことによって、つまり関係性の事実としてはじめて示される自らの商品の〈意味＝価値〉を、以前からそこにすでに実在していた客体的な〈もの〉であるかのように思い込むことによって調停される。このかぎりでは、相克する二

人が市場において合意に達したことは、それぞれの商品の物質的形態のうちにすでに労働によって前もって蓄積されていた共通の価値実体（物質的実体量）が客観的に内属していたことと完全に等価になる。そこにおいて実体（物質性）は意味（関係）のたんなる関数であり、逆もまたそうである。関係論と物質論は象徴としての商品において完全に「区別不能」となるのである。

二、象徴をめぐる差異

しかしながら、シェリング流の同一性の哲学にしたがつて関係と実体を同一視し、価値をたんに関係的にのみ規定することは、まさにシュミットが『マルクスの自然概念』（元浜清海訳、法政大学出版局、一九七三年）において指摘するように、マルクスにとつての物質的自然、つまり〈資本の他者〉を見失う結果を招く。

いうまでもなく現実の世界においては、市場における商品の交換、もしくは労働力市場における賃金と労働力の交換を通じて、途方もない経済的格差が発生している。しかしながらもし商品に内属する実体としての価値（人間労働の蓄積物）が、市場による交換によつてのみ象徴的（＝関数的）に規定されてしまうとすれば、経済学的には格差はそもそも生じないことになる。なぜならそこでは「共通のもの」が交換されたに過ぎず、交換の前と後において、市場において向き合う双方が所持する実体的価値量は全く変動しないからである。関係論に軸足を置く『資本論』解釈がこの反論に有効に応答することは容易ではない。

一つには、そもそも格差は生じていない、と開き直す手がある。賃金が不当に低いという労働者の訴えは、あなたの労働が社会的にそれだけの価値しかないことが現に労働力市場によつて実証されている以上、そもそも根拠がないというわけである。等価なものが交換されたのだからあなたは別に貧しくなったわけではない、労働者はその肉体のうちに元々それだけの価値実体しか保有していなかった、つまり労働者はもともと貧しかったのだ、ということに

なるう。これは無論、新自由主義の価値論である。

もう一つは、労働者が困窮しているとしてもそれは経済学の価値論とは別の問題である、と問題を切り分ける手である。曰く『資本論』は、とりわけ「第一章 商品」において、現行の資本制的生産様式内部での価値実証のあり方を、当の論理にしたがつて淡々と、いわば純理論的に述べているだけである。その価値実証体制はそれ自体としては正当でも不当でもない。だからこそ、経済学以外の実践論や唯物主義を経由してのみ、その価値実証過程を不正なものとなしうる、というわけである。この考え方はルカチをはじめとした西欧マルクス主義の系譜に引き継がれる(7)。

だが二番目のこの回答もふたたび同一の問題に直面する。というのも、「共通のもの」が交換され、労使の価値量の変動が生じない状況において、労働者にとって現行の価値実証過程が危機である状況がいかにして生じるのか、という問題を象徴論(＝関係論)が説明できないからである。テキスト内部における純理論的な価値実証過程を通じて、いかにして、テキスト外的な問題状況が、つまりは変革の契機が準備されるのかについて、経済学的な説明をなすことが関係論的な価値解釈には困難なのである。

この問題は、テキスト内在的には、『資本論』における労働力商品の価値論のうちに凝縮されている。第五章「労働過程と価値増殖過程」において労働力商品の価値は、労働力市場における評価のみではなく、同時に、その再生産費用(すなわちその労働力身体を維持するために必要とされる物質の調達費用)によって規定されるとマルクスはいう。ここで労働力商品の価値は、その消耗を補充するに「必要」な物質量(再生産費用)によって定義されており、その労働力商品が生産する商品にもまた当然のことながら、「必要労働時間」において平均的な労働者が支出した何らかの生化学的実質が注入されているのであって、それがその商品の価値をその「一面」において形成しているのである。こうした物質ベースの等価交換原理を前提としようで、労働力への補充物質分(必要労働時間)を上回る物

質的成果（剰余労働部分）をあえて労働者に生産させるとき、そこに剰余価値が生まれると『資本論』は論ずる。だとすれば、『資本論』の心臓部をなす剰余価値論は、その基礎を、労働者の肉体がその肉体の維持を超えて過剰に何かを生産する力、換言すれば無から有を生みだす生命の成長可能性に依拠していることになる。これが物質ベースの価値論である。市場と流通に基礎を置く関係論的な価値論が、こうした生産と身体に基礎を置く剰余価値論とどのような整合性を保つというのだろうか。

剰余価値論においてマルクスが労働者の身体という自然に依拠せざるを得なかったことは決定的である。というのも、そうした自然身体、すなわち物質への「一面」での依拠がなければ、労働と労働力、ひいてはその背後にある自然は、すべて市場の関係性の評価によって象徴的（関数的）に価値づけられてしまうからである^{（8）}。これに對抗する剰余価値論こそ、『資本論』の物質的・自然的、いうなれば唯物論的な特質を示しているのである。

『資本論』の記述は、たしかに一面においては資本の構成とその運動法則をその論理の枠内で冷徹に記述するものではある。しかしながらそれは価値の関係論の次元のみではなく、まさに関係と物質、市場価値説と労働価値説が見かけ上矛盾なく一致して運行する、そのありさまそれ自体を記述しているにすぎない。社会的関係性は物質的なものに条件付けられていると同時に、その物質的なものはさらに社交性を前提しているという不可分離しかたで、最終的な価値の基準点となるはずの象徴的なものがそこに存立している。資本制のうちにとらわれた意識、すなわちブルジョワジーの意識は、その象徴論的体制を無批判に受容し、その一致そのものを疑問視することがない。そしてその意識を引き継ぐかぎり、象徴としての身体を携えて、まさに自己自身は「商品」であるという回答によって、労働者もまた自らの価値評価に沈黙させられるだろう。

だが象徴であるはずの労働者の身体は、それではなにゆえに、その身体自身の上に不正を感じうるのだろうか。それは、労働者の身体が意味と物質の裂開それ自体を生きているからである。その裂開を裂開として規定するためには、

まさに価値の概念それ自体が、関係と物質、市場と（再）生産という二つの側面から規定される必要があったといえる。たしかに『資本論』の記述は、商品性を破壊されたむき出しの身体を描いてはいない。それはたしかに『共産党宣言』の課題ではある。だが『資本論』は、商品経済主体がその根底において齟齬を抱え込んだ存在であり、潜在的なプロレタリアートである可能性を、一見したところ矛盾するかのような二面的な価値論によって準備しているのである。労働者の身体がもはや象徴としての自己を生きることができなくなったとき、その目にとつて『資本論』はまさしく、象徴論的体制を正確に記述する経済学の書物ではなく、なにゆえに象徴を自ら生きることができなくなったかを開示する実践的書物に変貌するだろう。

『資本論』は、その象徴論的記述の内部に、みずからに対して奇妙な警告を発する部分を抱え込んでいる。『資本論』はその有名な個所（第一章第四節）において、人間たちの社会的関係によつて形成される価値が、あたかも自然的なモノであるかのように現れることを物象化と規定した。「商品形態は、人間たち自身の労働がもつ社会的性格を、労働生産物それ自体の対象的性格として、すなわちこれら諸物の社会的な自然属性として人間たちに映し出す *zurückspiegeln*」(86)。

「映し出す」というこの動詞はナルキッソス神話を想起させる。こちらに微笑みかける他者という象徴、すなわち湖と一体化した見かけ上の自然存在のうちには、自己自身との不断の関係性、すなわち自己自身を理想化する絶対的な関係性が「映し出」されている。危機を告げ知らせるエコーの声にもかかわらず、彼はその象徴の魔力から離脱しえなかった。あるいはナルキッソスは完全に欺かれていたのではなかった。何かがおかしいと気づいていた。だがそれゆえにこそ、その違和感を押し殺し、そこに理想の〈もの〉が〈ある〉と思い込むために、湖面のイメージに向かつて必死に語りかけるといふ関係性を駆動し続けた。まるでそれは、違和感を押し殺すために交換と労働を無限に反復する商品経済主体のように。パロールの反復強制に内在するこの自己欺瞞⁽⁹⁾、この「とりちがえ *Quidproquo*」こ

それが、結局のところは、彼自身の生きた身体を、反復強制の歴史により形成された「社会的な自然物」、すなわち水仙というもう一つの象徴へと凝固させてしまったのである。

だが象徴として主張される個別者のうちには亀裂が走っている。そこに亀裂があり、それを象徴のイデオロギーが強制的に押さえ込んでいるがゆえに、市場における価値実証は危機の局面で問題化しうるのである。市場価値と労働価値という商品そのものに潜在するこの差異、労働者の身体が毎日生きている両者の齟齬そのものが、『資本論』における深い意味での物質性（唯物性）の次元である。

マルクス主義における不幸の歴史は、関係と実体、意味と物質とが、商品という象徴において強制的に一致にもたせられる局面を、はじめは物質の側（ロシアマルクス主義）へと、のちには関係の側（ポストモダンの関係主義）へと、一方的に還元することによって継続された。どちらの解釈もその両者の一致そのものに、その象徴的仮象のありかたそれ自体に矛盾と振動があること、したがって一方への還元論的解釈そのものがすでに誤謬であることを見落としたのである。

三、リアルなものとしての生命過程

象徴的なものを巡って、ロマン主義者シェリング（もしくはゲーテ）とラカンの間には深い溝が走っている。ラカンにとって象徴性は、あくまで区別不能である（かのような）という仮想現実的性格、にもかかわらずその「区別不能なありさま」が強いられているあり方をもって現れる。シェリング流のロマン主義においては、象徴における意味はその物質的基礎と渾然一体である。だが潜在的に危機を抱え込む主体にとってその両者のうちには齟齬がある。というよりも、そうした主体は常にその齟齬を課されており、はじめからそれゆえに主体たり得ているのである。象徴のうちに差してくるこの差異、その影こそが、ラカンのいう「現実的なもの *le réel*」である。

この現実的なものは象徴的なものと取り違えられ、それと同一視されがちである。ブルジョワジーは、自然の強制力への対応を労働者に担わせて貴族を模倣するうちに、自らを一切の制約から自由な存在だと思い込むようになる。そうした〈自由な意識〉は、その意識によつて世界を十分に覆い尽くせるとナルシズム的に考え、商品からなる象徴こそ〈自然〉だと誤認している。それゆえに、その象徴形態を成立させるに至つた真の自然、つまり当の意識を強制して社交させるに至つた物質的基礎を意識化できない。自然的土台からもたらされる根源的受動性から無縁なかたちで、たんに人間の能動性の集積としてのみ、みずからの意識とその歴史が存立しているとかれらは（幸福にも）錯覚している。

だがそれでも現実的なものは、当の象徴それ自身を可能にしながらも、その意味によつて把握されず、そのかぎりで意味を持たず、あたかもカントの物自体のように、一切の関係性から滲出して〈ある〉。むしろこの〈ある〉ものは、ステイックな意味で実体的なものではなく、つねに象徴自身のうちからその象徴的形態にある種の強制力を発揮するもの、自己同一を求めながらもそれを達成し得ない非同人性、もしくは同一性自身のうちに含まれる振動として否定的に表現されるほかない。このように考えるならば、価値がそれとして存立するのは、それ自身のうちに関係と実体、意味と物質の差異、その破綻を内包しているかぎりのことだといふことができる。

この根源的受動性の次元、深い意味での自然必然性の次元を把握するのは、無論、たんなる自然科学ではない。というのも自然科学の理論的構築物は、リアルな生命過程の媒介によつて歴史のうちではじめて意識化された象徴（要素記号という礎石）たちからなる、それ自体象徴的な構築物だからである。そして同時に、主流派のマルクス主義が自称するいわゆる科学的唯物論もまた、まさにこの現実的なものを象徴的なものと取り違え、その結果、現実的なものを実体的に規定してしまい、その土台の上で歴史法則を説明するという誤謬を犯している。このかぎりマルクス主

義のいわゆる唯物論科学はあまりにも「ブルジョワ的」であつた⁽¹⁰⁾。

あるものを観念によつて把握するとき、その名付けはもちろん、ソシユールがそう誤解したように完全に偶然的なものでも、また主知主義がいうように意識の一方的な作用によるものでもない。能動的な意識作用によつて象徴が十分に構成されると考えるのは、ベンヤミンによれば「ブルジョワ的な言語観」である。というのも、言語は意識による物質の包摂ではなく、むしろリアルな〈もの Ding〉のうち、伝達されうる精神的本質に対応するからである。逆に言えば、意識のただなかへのリアルなものの突出のありさま、そのかぎりでの意識の破綻の様相それ自体が、その語の「精神的本質」なのである⁽¹¹⁾。だが言語がそうした意味で「象徴的なもの」だとすれば、それは象徴の元来の定義をはみ出していく。なぜならそのとき象徴は、物質と観念の全き一致なるものを実現するために、その一致の背後に〈もの〉の影（不可視の生命の歴史『自然史』）をその可能性の条件として前提しているからである。このとき象徴は、その観念的同一化をはみ出す物質的な要素をじつはその核心において露出させている。このかぎり象徴の真相はベンヤミンの言うアレゴリーである⁽¹²⁾。

そのようなアレゴリーとしての代理物のことをラカンが「小文字の対象a」と呼ぶ⁽¹³⁾。商品、およびその価値はまさしくこの対象aに相当する。象徴としての商品の具体的な意味様相は、商品の使用価値がそうであるように、主体のイマジネールな欲望の反映にほかならない。その現象の多様を同一の対象として統括する理念的な同一性を確保し、リアルなものとイマジネールなものをその一点において交叉させるのが象徴の次元（価値、もしくは抽象的人間労働といった抽象的実体概念）である。この統握の一点こそ、イマジネールな意識が象徴を自称しつつ、その向こう側に存在するはずのリアルなものに触れている限界点 *etwas* である。ここが欲望の核、その目標となる。そのかぎりでその象徴的なものには裂け目が開いていて、それゆえに象徴の真相はアレゴリーなのである。（図一）

問題は、こうした対象aとしての商品のありかたを、資本制の生産様式のうちでは、みずから労働力商品として労

働者自身が引き受けざるをえないということである。対象aとしての人間は、他者の欲望の対象となり、そうなることを自らの欲望とすることではじめて社会的存在、社会的主体となる。対象aがその身にまとうている様相をまさに自らの様相として引き受けるこの鏡像的關係において、主体の社会的視野はかの限界点を視点とする線遠近法のパースペクティヴのうち

に構成される。そしてその視点のただなか、もしくはその背後に、自らの主体性を支える不可視な「リアルなもの」、すなわちその生命過程および歴史的生成過程を抱え込むことになる。(図2)

商品と主体をこのように対象aとして規定するとき、『資本論』における剰余価値論はいかなる解釈を許容するであろうか。ここで価値はたんなる関係性によつては発生しない。というのも、等価交換の原則を守るかぎり、交換から剰余価値は発生しないからである。また価値は生理的な投下労働からも発生しない。というのもそれが他者にとつて有用な労働生産物であることを市場で実証されなければならないからである。

だとすれば労働者は、他者からの期待、すなわち期待される社交関係を内面化して生産に従事することになる。というのもその期待は、自らの生産物が市場において見込み通りの評価を受けることを前もって労働者に予測させるか

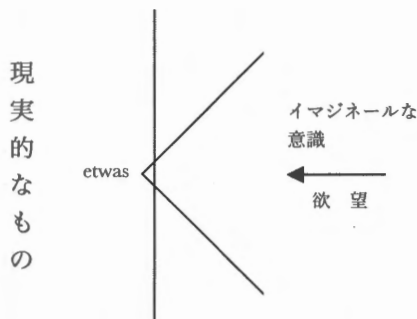


図1 象徴、対象a、商品、言語

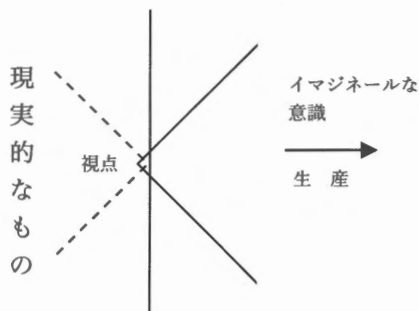


図2 労働力商品、主体の視野

らである。とすれば最終的には価値は、主体の（決して言語されない）生命過程をその限界まで最高度に酷使するかたちで、他者一般の期待に応える生産物（行為）を構成する〈ディシプリンの行為〉によってリアルな領域からいわば吸い出されることになる。（図1と図2を重ねて）

四、神経症としての生産

精神分析の言説によると、母親との根源的一体感の内に生きる幼児は社会の代理者としての父の介入によってその全能感を奪われ、父母と距離を取ると同時にそれに引きつけられるコンプレックスのうちに陥る。だがこの根源的な父母との経験は忘却（原抑圧）されて、主体はおのれの無力感を回復する代理的記号を生涯追ひ求め続けるようになる。これは典型的な強迫神経症の構図であり、その反復強迫の衝動として、対象aとしての商品の生産、および消費を主体は強要される。

抑圧されたリアルなものを意識化し、自己の神経症を解除する代わりに、その代理物、ニセモノ、覆い絵としての対象aを追い求める（行動化）。象徴的なもののうちには現実的なものが浸透し、その象徴としての外皮のうちにその影を映し出している。具体的様相の核心に露出している現実的なものの極点と触れあうその一点を窓として、その向こう側にある不可視な現実的な領域へと欲望は差し向けられている。そのかぎり主体は、現実と幻想が完全に融合する地点、すなわち象徴を商品のうちに構成しようとしているといえる。だがその象徴は不完全なものである。

主体は幻想と現実がふれあうその限界点の周囲をなでまわすことで、様相の核心にあるリアルなもの、その不可視の歴史、真の主体性の座をこの手で舌で把握しようとする。しかしその接近は決して成就しないので、商品経済主体は商品（対象a）を生産し、かつ愛玩し、そこにリアルへの超越を感じなくなると次なる対象aに手を伸ばす。主体は自ら手にした象徴が不完全であることをどこかで知るがゆえに、ナルキッソスのごとくその生命を使いつくすま

で、次なる象徴を無限に追い求める悪無限のサーキットに囚われる。

そしてこの生産と消費の反復脅迫は、対象aとしての労働力商品、つまり労働者自身の再生産をも規定する。価値の源泉としての労働者の身体は社会的な身体Ⅱ対象aである。だが同時に労働者はその対象aを内側から生きており、したがってその内部に現実的なものを抱え込み、それに血を通して存在である。『物質と記憶』におけるベルクソンが言うように、その不可視の現実的なもの（純粹記憶）が、点線の円錐の頂点のごとくに現在という現象面Ⅱ知覚面に投影されており、そこに無数の象徴が成立している（図2 点線部分）。

したがって労働者は、その象徴を生産し消費することによって、その商品と関わる記号商品としての自己自身をも再生産しなければならない。しかもその再生産とは、もはや単純な労働能力の維持ではなく、人々の欲望の対象となり得る記号的価値の向上的再生産でなければならない。記号的商品の生産・消費という、商品との戯れをつうじて、みずからの記号としての労働力商品の「価値」を高め、自己自身をつねに象徴として構成してゆかなければならない。そしてその過程もまた、象徴として演出する自己が不完全であることを知るがゆえに、次なる象徴をして自己を無限に構成する循環に陥ることになる。

産業資本主義の時代においては、人間の「必要」によって労働の有用性を比較的安定して予測できるがゆえに、労働力商品の「価値」は、生理的な実質を支出しうる能力によっておおむね評価可能である。これに対して、消費社会においては、その生産力の水準が生物的必要の次元を乗り越えて展開するため、労働力の価値は、その有用性を決定する欲望により多く依存することになる。欲望に依拠する有用性は、必要にもとづく有用性より遙かに不安定で投機的である。いかに生理的な実質を労働者が支出したとしても、誰の欲望の対象にもなり得ず、その有用性がまったく評価されない場合、その支出された労働の価値はゼロである。いまや労働力商品の価値とは、みずからが市場において欲望される可能性、市場という社交場において自ら自身の身体のみが多くの人々の強い欲望の対象となり得

る、そうした象徴形成の可能性のことである。

したがって労働者の「現実性剥奪」は、その生化学的実質の単純な窮乏化というよりは、生物的生存の水準を最低限維持したまま、その記号的価値が剥奪され、社会的潜在能力が窮乏化する過程としてより強く現象することとなる。こうした意味で労働者が窮乏化するときに破壊されるのは、対象aとしての労働者の象徴的性格、つまり記号的商品性である。ホームレスがもはやその固有名で呼ばれないように、労働者はイマジネールな快楽の魅力、サンボリックな個体的現実性をそのとき喪失し、現実的なもの、つまりいかなる社会的局面にも認知されることのない生命過程そのものへと強制的に差し戻されてしまう。ここで「現実性剥奪」は世界内部における現実性、つまり象徴的現実性の剥奪を意味する。生物的生存を保ったまま、この自己喪失への敷居の上に位置するのが現代のプロレタリアートなのである(14)。

五、主体の実践論、或いは精神病

マルクス以後のマルクス主義が陥った決定的誤謬の一つは、先述の通り、この現実的なものの次元を見誤り、それを象徴的なものと同一視してしまったことにある。下部構造が上部構造を規定するというときのこの下部構造とは、意識に現象しない下部意識、もしくは生命過程とその歴史、もしくは、それ自身感性を通じて現象することはないが、それが存在することを理性が推論を通じて理論的に構成するという意味での「叡智的なもの」であるはずである。だがすでに概念によって規定された特定の物語としてそれを「取り違え」たがゆえに、その存在論的誤謬が、マルクス主義を全体主義へと転落させたのである。

だとすれば、既存の史的唯物論が無残な失敗に終わった後では、現実的なものの歴史、つまり生命の自然史をいかにして規定可能か、があらためて問われなければならないだろう。その答えは、弁証法的唯物主義という概念に準備

されている。ここで分析主体の歴史とは、まさにその象徴的破綻の敷居において、それを準備した、もしくはそれを救済しうる、アレゴリーの連鎖として〈裂け目の内に陥った眼〉に現象するかぎりのものとなる。

まずそれがアレゴリーであるのは、それが破綻のさなかに現象する概念の連鎖であり、それゆえにその概念は十分に物質と融け合うことなく、いつも物質の過剰を、それゆえに意味の過少（＝仮象的性格）を示しているからである。意味は物質を十分に抑えきることができず、物質の過剰に対応するかたちで次々と連鎖を取る。そしてその連鎖がたんに理論的ではなく実践的であるのは、その連鎖は制約なき観照的主観ではなく、破綻を迫られ、否応なく「リアルなもの」の方へと差し戻され、それゆえ意味と無意味の線上をさまようかぎりの主観性に対して、その実相に応じて現象するからである。その連鎖は、過去や現在の事実というよりは、そのつどその生を助ける可能性を示す過去もしくは未来の連鎖として、そのときのその主観性にとつてのみ、客観的である。

敷居の上に位置する主体とは、すでに神経症の反復強迫を生きることが困難となった主体性のことである。リアルなものと象徴的なものとをやりとりするコードを喪失し、象徴による「現実世界」を形成するシンタックスを崩壊させ、その主体としてのあり方を維持できなくなりつつあるそうした主体性である。その代表的な主体性の症状は、統合失調症とうつ病である。反復強制としての神経症から、シンタックスの機能不全の精神病へと移行する境界地帯⁽¹⁶⁾、これが、意味のプロレタリアートが追い込まれる「資本制の底」である。

この「資本制の底」は病的状態にある特殊な人々のものであるか。そうではなく、程度の差はあれど、現代の意味論的な資本制に適応を迫られるすべての人々が共有する危機であると思われる。というのも自己の価値を維持する意味論的な関係秩序は、記号的価値の剥奪と差別的配分を動力とする資本制によつてつねに脅かされているからである。そのとき主体は、他者のイマジネールな欲望との相克において象徴の楔を正當に設定することに失敗し、みずからのイマジネールな欲望の力に押されて、その内部でヴァーチュアルに象徴的次元を強迫的に構成する圧力に曝される。

こうした意味論的防衛ラインによって自我がcaろうじて存立しているのである。自我の防衛のために象徴的次元（すなわち現実性）を不適切に設定してしまえば、それは自己愛性／反社会性／演劇性／回避性といった様々なパーソナリティ障害の症状として現れるだろう。それは外界との整合的な意味秩序を構成できないため、自我の意味論的秩序にシンタックス・エラーをリフレクティヴに発生させる。それを適切に修正できなくなれば、意味論的秩序は全体として深刻な不調に落ちいるであらう。

そうした底部の下には、自我の有意意味な意味論的秩序が多面的に崩壊し、関係性を形成する媒介が破綻し、オブジェクトレヴェルとメタレヴェルの区別が消失する深い精神病の次元がある。このとき主体は、みずからの生の現在を、過去と未来との有意意味な連関のうちに位置づけることができず、歴史の外部、すなわち現実的なものの次元へと押し出される。

このとき、この意味論的秩序は有意意味に、つまり歴史や社会と何とかコミュニケーションできるかたちで表現されることはもはやない。だからこそ、その境界地帯、底部からその下部を予感し、下部的なエトヴァスによって自己を侵食させていくそのあり方こそが、歴史を見つめ返す最後の地点となる。唯物主義とは、表象され得ず、それゆえ実質の規定を持たない「このもの *etwas*」との境界において、その外部の力を借りて、なお象徴を紡いでいく努力である。そしてそれが弁証法的であるのは、象徴的なものの限界、つまり意味の果てるところにおいて何かを見ようとし、そこで見えた「もの」を自らの内に抱え込むことによって新しい意味秩序を形成しようとするからである。

強調された意味での実践とは、これまでの神経症的反復強迫にたんに従うことではなく、この不可視なものとの関係において新しい生を生きようとすることであり、このかぎり破綻と可能性を同時に生きることなのである。マルクス生誕から二百年後になお学ぶべきなのは、科学的社会主義や史的唯物論と呼び習わされてきたかの様々な象徴的物語ではなく、意味として捉えられる可視的な歴史から押し出されつつも、不可視な物質、リアルな〈歴史〉に支えら

れている、そうした「主体」の生起についての鋭敏な感覚なのだといえよう。

註

(1) なお、文中数字のみの出典表記は、Marx, *Das Kapital Kritik der politischen Ökonomie Erster Band Buch I*, Dietz Verlag, Berlin, 1962. のページ数を示す。なお引用文中の訳文は、大内兵衛・細川嘉六監訳『資本論』（大月書店、一九六八年）を参照しつつ、一部を改めて訳出している。

(2) ヘーゲルは、主人と奴隷の二者間の相克的関係や、それに基づく市民的社交関係一般を駆動する根源的な動力として、「欲望(Begierde)」を規定した。『精神現象学』のヘーゲルにおいてこの概念は、物質的必然性を他者に担わせ、自らは自由な関係性の領域へと離脱しようと欲する二者間の垂直的確執のうちに出現する。しかし『法の哲学』においては、その概念は市民社会における水平的な関係性を駆動する一般的な動力へと化している。これに対してマルクスは、プロレタリアートの歴史的位位置を問題化するために、すでにブルジョワ的前提と化した欲望の概念を、現実の世界史における「必要」と暴力の水準にふたたび差し戻さなければならなかった。これが、ヘーゲルの市民社会性に対抗するマルクスの唯物論的動機を形成する。これら「必要」や「欲望」の概念は、十七世紀における主体の動力を示す最初の属性的・機械論的概念である「コナトウス」を引き継ぐ系譜のうちにある。コナトウスの概念は、精神分析においては、リビドー経済を駆動する動力、すなわち「欲動(Trieb)」として継承される。

(3) 「想像的」、「象徴的」、「現実的」という三つの概念は、まとまったものとしては、セミネールの第一巻、ジャック・アラン・ミレール編『フロイトの技法論』第七章「想像的なものの局所論」などを参照。Lacan, *Les écrits techniques de Freud, Le Séminaire livre I*, 1975, Seuil, p.87.

(4) Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Werke 3, Suhrkamp, S. 150ff. ヘーゲル『精神現象学 上巻』（金子武蔵訳、岩波書店、一九七一年）一九〇頁以下。

(5) マルクスは第二章の「交換過程」において、この上ない明瞭さでこう述べる。「商品に支出された人間労働は、ただ他人にとって有用な形態で支出されているかぎりでしか数に入らない。ところがその労働が他人にとって有用であるかどうか、したがっ

て又その生産物が他人の欲望を満足させるかどうかは、ただ商品の交換だけが証明できる」(100-101)。

(6) Schelling, *Texte zur Philosophie der Kunst*, Reclam, 1982, S.191.

(7) ルカチチの『歴史と階級意識』は、「プロレタリアートの危機を単純な窮乏化ではなく、その意識の物象化におく。ここで意識が物化・合理化することが、なにゆえにプロレタリアートにとつての「危機」となりうるのか。ここで客観的現実とは、労働者自身のあり方も含めた回避不能な状況として、いま・ここに、いわばアン・ジツヒに〈存在〉するだけであり、その状況を主體的に引き受けることで労働者ははじめて現実に対する判断を遂行し、階級を自覚して変革の主体となり、〈歴史〉のうちで真に実在的となる。こうした「階級意識の客観的可能性の理論」が、価値の關係論の規定と親和性を持つには理由がある。

(8) たしかに価値を形成する抽象的人間労働は社会的な有用性の評価によって規定されている。しかしながら同時にそれは、人間の自然身体が支出する一般的な労働の量、すなわち24時間という時間に規定される身体を持つ人間が、その身を削って支出する実体的な量、すなわち労働時間によって計測される物質的な量でなくてはならない。抽象的人間労働のうちに、関係性と実体性の二面性が刻印されている。

(9) 『声と現象』の「デリダによれば、物質と意味、声と精神、個別と普遍の間にはずれ(原エクリチュール)があり、その隙間を抑え込む繰り返しの同定作用、定冠詞による再認の強迫的な反復作用によって、象徴の「絶対的に区別不能なありさま」は仮象としてのみ維持され生きながらえる。その目的が仮に成就するとすれば、そのとき、「ずれなき声、エクリチュールなき声は、絶対的に生きていると同時に、絶対的に死んでいる」ということになる。Derrida, *la voix et le phénomène*, PUF, 1967, p.115.

(10) マルクスはこの非同一性を有名な「フォイエールバッハテーゼ」において「対象化する活動性 *gegenständliche Tätigkeit*」すなわち「実践 *Praxis*」と表現した。客体的、すなわち象徴的なもの以前にあるこの剰余、生きて活動する生命性の次元を物質のうちから排除したことが唯物論の最大の誤りだとマルクスは主張する。「これまでのすべての唯物論—フォイエールバッハのものも含めて—の主要な欠陥は、対象、現実性、感性をただ客体あるいは直観の形式のものでのみとらえていて、感性をそなえた人間の活動や実践としてとらえず、主體的に捉えないことにある」。ここで「感性的」とは、「思考の対象から実際に区別される」ありかたのことを意味し、そうした「感性的客体 *sinnliche, von den Gedankenobjekten wirklich unterschiedene Objekte*」の次元をじつはフォイエールバッハは望んでいたというのである。マルクスの「フォイエールバッハテーゼ」と、それにもとづくエンゲルスの「フォイエールバッハ論」との差異、つまり自然科学の所見をそのまま唯物論の基礎とみなすエンゲルスとの差異は決定的である。Marx, *Thesen über Feuerbach*, *Marx-Engels Werke Band 3*, Dietz Verlag, 1962, S.5.

(11) ベンヤミンの短論文、「言語—一般および人間の言語について」(一九一六年)によれば、言語(とりわけ名)が伝達するのは人

間の意図ではなく言語に対応する「精神的本質」であり、その伝達は言語を「通じて durch」ではなく、言語に「おいて in」なされるとベンヤミンは主張する。Benjamin, *Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen*, *Gesammelte Schriften II-1*, Suhrkamp, 1977, S.142. 『ベンヤミンロクシエン』(浅井健二郎編訳、ちくま学芸文庫、一九九五年) 一頁。「ブルジョワ的言語観」については *Ibid.*, S.144 同、一五頁を参照。ベンヤミンはここで事物の物質的次元と言語の精神的本質を区別し、事物の「黙してある」部分について言及している。「言語そのものは、事物それ自体においては、完全に語られるものとはなっていない」(*Ibid.*, S.147 同、二〇頁)

- (12) この点で、ベンヤミンのアレゴリー論は、美術史における通常のアレゴリーやバロック概念と対立している。美術史においてアレゴリーは、とりわけマニエリスムやバロックに関して、物質に対する精神の過剰、つまりルネサンス的な象徴的均衡に対する意味の過剰、ひいてはそこから生じる象徴の歪みを意味する。これに対してベンヤミンは、ノヴァーリスやシュレーゲルといった初期ロマン派に依拠し、象徴における精神的要素の内在的過剰によってアレゴリーを定義する。それゆえに象徴はその精神的内実を充実させるために他の象徴を無限に要求し続ける。これは「連関の無限性」と呼ばれる。Benjamin, *Die Bedeutung der Reflexion bei den Frühromantikern*, *Gesammelte Schriften Band I-1*, Suhrkamp, S.26. 『ドイツロマン主義における芸術批評の概念』(浅井健二郎訳、ちくま学芸文庫、二〇〇一年)、四八頁。美術史におけるアレゴリーが意味によって規定されるのに対し、ベンヤミンにおいて単体としてのアレゴリーは明確な意味を示さず、したがって他のアレゴリーとの連関のうちではじめて全体としての理念が星座のごとく示されゆくことになる。

- (13) 対象 a にはさまざまな意味を読み込むことが可能である。それはまずもって主体の他者、つまりイメージネールな欲望の対象という意味での *autre* であるが、また再認以前の英語の不定冠詞 a を連想させもする。それに惹きつけられ、それを対象化するよう強要されている、そうしたいまだ名を持たぬ原初的な対象化の次元、リアルに対する意識の裂開の次元をそれは示しているかのようだ。なおラカンは *Aim* の a をこれに当てた記述をしている。Lacan, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, le Séminaire Livre XI, Éditions du Seuil, 1973, p. 200. 小出浩之は訳『精神分析の四基本概念』(岩波書店、二〇〇〇年)、一三〇頁。

- (14) この点でやはり想起されるのは二〇一六年に神奈川県相模原市で発生した知的障害者施設「津久井やまゆり園」における大規模殺傷事件である。この事件で弟を亡くしたある被害者遺族は、被害者の実名が公表されないことについて、「この国には優生思想的な風潮が根深くあり、すべての命は存在するだけで価値があるということが当たり前ではないので、とても公表することはできません」(二〇一六年八月六日毎日新聞)と発言している。

(15)

こうした境界地帯における障害状態は、パーソナリティ障害と呼ばれる。神経症的強迫症状が特定部位の症状から人格全体へと波及し、なおかつ同時に象徴的次元と想像的次元を分別する機能が弱まった状態がそれに当たる。そこで主体は、自我の誤った象徴的秩序をまさに強迫的に張り巡らせ続けることになる。これについては古賀徹『愛と貨幣の経済学 快楽の社交主義へ』（青灯社、二〇一六年）、一五四頁以下を参照。